

我孫子市安島昌平家文書

安島家は、幕末に水戸藩の家老を勤めた安島帯刀の系譜を継ぐ家である。帯刀は戊午の密勅（1858年孝明天皇が水戸藩に①安政の五カ国条約調印の説明要求②公武合体し、攘夷推進の命令、の廻達を命じたもの）により切腹するが、彼の兄妹は明治以降も存命であり、特に妹たちは水戸藩・一橋徳川家などの奥女中として勤めている。

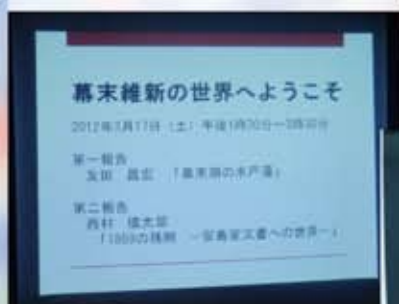
現在安島家に残されている資料群には、水戸藩藩主斉昭の書画や書状、昭武の写真など水戸家に関連するもののほか、帯刀の姉妹が残したと考えられる和歌や随筆、手習いなどが見られる。これらの史料から幕末から明治にかけての女性の様子が垣間見ることができよう。詳しい史料紹介は『じゃんぴん』バックナンバーをご覧ください。また、今後目録の刊行を予定している。



安島家の資料整理のひとつの成果として、2012年3月17日に松戸市戸定歴史館との共催により、松戸市民会館において、報告会「幕末維新の世界へようこそ」を開催した。

報告内容は友田昌宏氏「幕末期の水戸藩」、西村慎太郎氏「1859の残照 - 安島家文書への世界 -」の二本の報告を行った。その後、松戸市戸定歴史館へ移動し、学芸員の斎藤洋一氏より戸定邸（水戸藩藩主昭武が隠居した邸宅）・歴史館の案内をいただいた。

当日は雨の中大勢の方にご来場いただき、この場を借りて感謝を述べたい。（文責 武子裕美）



友田昌宏氏報告



西村慎太郎氏報告



斎藤洋一氏解説

秩父市今宮神社文書保存・調査活動について

今宮神社は八大竜王と宮中八神を祀った神社で、戦国時代には疫病の蔓延により京都今宮神社を勧請して八大社と称した。八大社の別当が秩父札所のひとつ今宮坊である。家康入国によって朱印地10石が与えられており、聖護院門跡より秩父郡本山派修験の年行事職に補任されていた。

2009年10月19日に平川新・佐藤大介・高橋陽一各氏と筆者で、現状の確認をし、一部の写真撮影を行なった。文書群全体の保存・調査を当法人が行なうこととなり、2011年7月30日～8月1日、2012年2月11日～13日にかけて作業を実施した。文書の保管は収蔵器10点に分かれており、いわゆる古文書の類ではなく、現用・非現用が混在しているものも見られた。それらの文書の現状記録の作成・ドライクリーニング・保管環境を考えた一点ごとの収納（AFハードボードや中性紙封筒）と写真撮影を行なった。とりわけ、近世の徳川將軍家より与えられた朱印状や聖護院宮門跡から与えられた御教書は大きいため、専用の収納箱を作成した。目録作成は箱1の途中である文書番号1-210（299点）まで終了し、写真撮影は1-200まで終了した。今後も年に数度の保存・調査活動を展開する予定である。

箱1の内容は年代的に多様であるが、最も古いものは天正19年の徳川家康朱印状の写し（作成年代は幕末か）。全体としては近世後期の朱印状受け取りに関わる文書が多くを占めている。同社の文書は『埼玉県史』にも収録されているが、一部であり、当該地域の近世修験を考える上では貴重な文書群である。その他、近代以降の秩父地域の文化・教育に大きな功績を残した塩谷備に関する文書も多く見える。（文責 西村慎太郎。参加者：梅田千尋・漆畑真紀子・奥平暁子・木本洋祐・武子裕美・竹田俊一・田村亮世・千葉かおり・西村慎太郎・南隆哲）

南伊豆町差田外岡家文書保存・調査活動について

2011年4月23日南伊豆町の南に位置する外岡家文書の所在確認を行ない、同年7月9日から11日にかけて保存・調査活動を行なった。同家は近世段階において当該地域の新八幡宮・深草王子というふたつの神社の鍵取（神職のひとつ。文書番号41による）を務めた家であり、日露戦争においては当主久米吉（彙吉）氏が陸軍歩兵軍曹として従軍している（勲七等功七級）。文書群は大きく分けて①蓋付き木箱に一括されたもの、②縦長の木箱に一括された近現代文書の二つに分類できる。②については作業途中であるため、ここでは①のみ概観を述べたい。

蓋付き木箱には文書番号1～45の95点が収められていた。箱の上部に様々な寺社の御札・御守りが大量に詰められていた。地域的には三河から伊豆・相模の東海地域が多いが、信州善光寺や日光山も見られる。その下に主に卷子状の文書が47点収められていた。あたかも上に詰められていた御札・御守りに守られているような状態である。卷子状の文書は小笠原流礼法書であり、弓法に関するものが多く占めた。年代が把握できるものでは文禄5年（1596）から寛永16年（1639）の文書であり、なぜ同家にこれほど多くの小笠原流礼法書が伝来したかは不明である。いずれにしても、小笠原流礼法を検討する上で重要な文書群であると言えよう。なお、御当主の話によれば、これらの文書は古くより屋根裏に置かれており、当主以外に見ることができなかったと言う。今後の調査に期待されたい。現在の作業は目録作成が270点（文書番号47-100）、写真撮影が47点（文書番号45）までが終了し、7月10日に御当主をはじめ御家族の皆さまに対して文書内容の説明を行なった。

これらの卷子は紙質が脆弱になっていたため、一点ごとの文書を収納するため、専用の箱をAFハードボードにて自作した。（文責 西村慎太郎。参加者：岡村龍男・奥平暁子・栗原佳・武子裕美・田中潤・千葉かおり・西村慎太郎・増田垂矢乃）

南伊豆町下賀茂渡辺家文書ガラス乾板の保存処置について

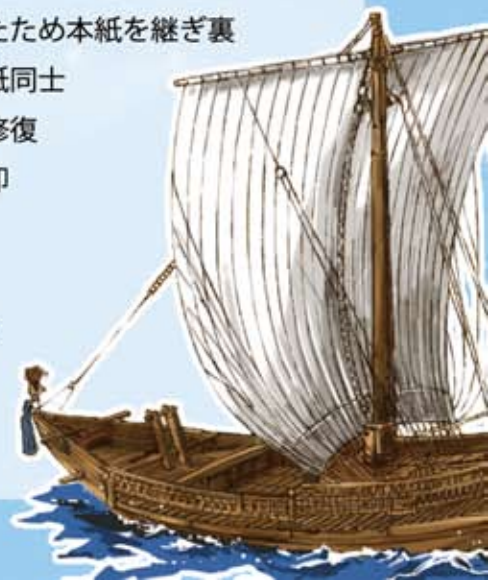
2011年11月18日～21日の静岡県賀茂郡南伊豆町下賀茂渡辺家文書の保存・調査活動において大量のガラス乾板が発見された。当初、文書が中心でありガラス乾板が残されていることを想定していなかったため、保存処置のための道具を全く持っていなかった。加えて、同家横を流れる青野川の氾濫に伴う泥が付着しており（数度にわたるが今回の泥がいつのものであるかは不明）、それらの除去が課題となった。そこでこのような現場で行える最低限の応急処置と必要な道具を竹内涼子氏（NPO法人 デジタルヘリテージデザイン）に御教示頂き、次のような形で作業を進めた。①精製水・綿棒・キッチンペーパーを薬局にて確保。この点、当該地域には大型薬局が営業していたが、このような道具は多くの薬局で確保できるものと思われる。②ガラス乾板の表面の泥を精製水と綿棒で除去する。③乳剤が塗布されている面の泥を精製水と綿棒で細心の注意で除去する。この面はすでにコーティングや画像が剥がれており、銀が浮いている状態（銀鏡）であったため、乾板を保管している責任者の方と相談の上、注意深く作業を行う必要があった。④上記の処置後、自然乾燥をするとさらなる劣化の恐れがあるので、すぐにキッチンペーパーで水分を丁寧かつ細心の注意でふき取る。又急激な乾燥による劣化を防ぐため、キッチンペーパーを湿らせたものを乾板の乳剤面にのせ、ゆっくりと乾燥をさせる。⑤横置きで積んだ場合、加重などで割れる恐れがあるため、立てた状態での保管が望ましく、そのための保存箱を作成した。但し、中性紙ダンボールが皆無であったため、手近にあったもので製作を試みた。第一に一升瓶の酒が入っていた箱を外箱として、引き出し型の内箱を四合瓶の酒が入っていた箱で作成した。第二にそれぞれのガラス乾板を薄葉紙で包んだ。第三に内箱の仕切りにクッションとして緩衝材（これも酒の緩衝材を転用した）を設置した。いずれも初期処置であり、現場にあるものをどのように用いてより有効な保存を考えるか実践したものである。次回の活動ではAFハードボード中性紙など資料に悪影響を与えない材料を利用して保存箱の作製を行なう。（文責 奥平暁子。作業従事者 浅井千香子・奥平暁子・武子裕美・千葉かおり）

¹ 銀鏡（ミラーリング）とは、画像を形成する銀粒子が酸性の雰囲気や湿度によって局部的に酸化されて銀イオンを拡散し、この銀イオンが表面に達して還元されて起こる現象である。

東洋美術学校修復作業について

例年行なっている東洋美術学校造形美術科（東京都新宿区）での修復作業だが、本年は虫損の激しかったものを中心に7点の修復を行なった。朱文筵文庫文書2点・あきる野市坂本家文書2点・南伊豆町渡辺家文書3点である。朱文筵文庫文書は虫損の裏打ちなどを行なった。坂本家文書1「乍恐以書付奉願上候」は継紙が剥離していたため本紙を継ぎ裏打ちを行なった。渡辺家文書は全て近代の横帳だが、虫損が激しく、紙同士が固着しているところもあったが、丁寧に除去し、裏打ちを施した。修復終了後、詳細な「修理報告書」が提出されたので、所蔵者への文書返却に際し、「修理報告書」の提示も行なった。今年度も修復作業を行なう予定である。

これら作業については、指導を行なった櫛笥節男先生をはじめ、東洋美術学校造形美術科の教員・学生の皆さまに多大の御協力をいただきました。ここに御礼を申し上げます。（文責 西村慎太郎）



茨城史料ネットのしスキュー参加

茨城史料ネット（茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会）は 2011 年 7 月 2 日に発足した。茨城史料ネットの詳しい活動については、参考文献をご覧ください。ここでは当法人が参加している活動について報告する。

茨城大学で行われている活動は、茨城大学の大学院生、学生を中心とし、毎週水曜日 1 時から 6 時までである。対象資料は、北茨城市平潟地区から同市内の廃校となった小学校へ一時避難した資料である。

手順としては、①1 点もしくは領収書のまとまりごとに並べ、それぞれに番号を付与する。その後全体の俯瞰写真を撮影し、一点一点番号ごとの写真を撮影する。同時に全体のスケッチも行う。②1 点ごとの概要目録を作成する。概要目録は、表題、年代、作成、宛名、形態、数量、備考、一括情報を記載する。③泥や埃などで汚れているものは刷毛や筆でドライクリーニングを行う。④中性紙封筒に番号ごとに納める。点数が多い際は、付箋で番号をつけ 10 点程度をまとまりとして同一の封筒に収める、又教科書や和本などは封筒に収めず付箋のみで対応する場合もある。⑤資料は基本的に中性紙箱に収納するが、元々木箱などに納められていた場合はなるべく元の箱に戻すようにする。これは所蔵者に返却する場合、収納場所の問題が発生するためかさを増やさない為である。

茨城史料ネットはこのほか茨城県内外の資料を多数扱っている。救済・保全活動が必要である資料群もまだまだ残されている。当法人は、今後とも茨城史料ネットへの参加・協力をしていきたい。（文責 武子裕美）

活動報告

- 2月6日 調布市小田切家文書保存・調査活動
- 2月11日～13日 秩父市今宮神社文書保存・調査活動
- 2月17日 例会（「記録としての写真・表現手段としての写真」齊藤洋一さん（松戸市戸定歴史館学芸員））
- 3月16日～20日 掛川市熊切家文書保存・調査活動協力
- 3月17日 成果報告会「幕末維新の世界へようこそ」（松戸市民会館）
- 3月24日 歴史科学協議会シンポジウム「原発震災・地震・津波 - 歴史学の課題 - 」報告
- 4月21日 世田谷区川村家文書保存・調査活動
- 5月10日 東洋美術学校による修復文書の受領
- 5月20日 調布市佐橋家文書保存・調査活動
- 6月24日 世田谷区川村家文書保存・調査活動
- 6月25日 台東区市田邸文書保存・調査活動

その他、毎週水曜日及び3月20日・24日・31日・4月1日・5月18日・19日に茨城史料ネットの活動に協力